特別寄稿

バゼビバカ・ピエール会長追悼

国際学部教授
おやさと研究所兼任研究員
森　洋明　*Yomei Mori*

2021年10月1日、コンゴブラザビル教会5代会長のバゼビバカ・ピエール氏が出直した（死去した）。突然の出来事だった。コンゴの医療体制が不十分なこともあるのだろうか、死因が特定できないままだった。教会関係者によれば、亡くなる数日前までは体調を少し崩していたようだが、亡くなるとは誰も予想だにしていなかったという。コロナウイルスの検査は陰性で、アフリカでは死因が一番のマラリアは疑われたものの、特定はされていなかった。「肺に影があるとの検査の結果を受け、医者の治療を受けるから大丈夫」と本人からSNSで連絡を受けたのが9月30日の夕方だった。しかし、その翌日の1日の朝、容態が急変したので、車であちらこちらの医療機関に出向いた。しかし、治療できる体制が整っていないと断られ、首都の総合病院に行ったところ、付き添いが受付で入院を交渉している間に、その待合室で息を引き取ったという。享年60歳。今年6月に還暦を迎えたところだった。

コンゴブラザビル教会は、1966年9月、中山正善2代真柱の主導の下で設立され、すでに50年以上の伝道の歴史がある。2016年には真柱夫妻や真柱後継者が巡教されるなかで、盛大に設立50周年が挙行された。おやさと研究所では、この『グローカル天理』を通じて堀内みどり氏がその歴史を振り返ってきた。また、「海外部の後方支援」としての役割を担っている研究所の活動として、しばしばこのコンゴでの伝道の事例を取り上げ、「伝道フォーラム」や「伝道研究会」の場を通して、さまざまな角度から検証をしており、それらは『二代真柱とコンゴ布教』（2001年）や『コンゴ伝道の諸活動』（2011年）などにまとめられている。

私自身も海外部勤務の時代からコンゴ伝道に関わってきたこともあり、本誌を通じてコンゴ伝道について連載し、またそれを『伝道宗教による異文化接触』（2013年）でまとめている。この連載のなかに見られるさまざまな角度からの問題提起は、実は、実際の伝道の現場で、常に異文化との狭間に置かれ多くの問題に直面したバゼビバカ氏から大きなヒントを得ていたのである。彼とは23歳で出会ってから30年以上の付き合いがあり、友人とも言える存在だった。私がコンゴに常駐していた当時（1986～1989）は、私自身のフランス語運用能力が十分でなかったので、彼と話す機会がそれほど多くなかったが、90年代以降、コンゴに行くたびに、コンゴ伝道の将来や現状での問題点などについて語り合った。ときには彼との議論が熱くなり、お互いに冷却期間を必要とすることもあった。そして、彼の布教伝道に対する思いは常に真剣そのものだった。

バゼビバカ氏は父親からの信仰を受け継いだ。13人兄弟姉妹の末っ子で、兄弟姉妹のなかでは彼を含め3人が信仰を受け継いだ。幼い頃から両親とともに教会に通うなかで、彼の信仰は自然と身についていったと言う。「教理など最初は分からなくても、おつとめをしてそれが自然と身についていった」と、彼はしばしば自身の信仰の原点を振り返った。彼の父親は、教会設立以前の布教所時代に集まってきたコンゴ伝道の草分け的な先人の一人だ。実直で正直だった父親は、日本人布教師からの信頼も厚かった。その父親の信仰を自然と引き継いだピエール氏は、父親譲りの実直さと真面目さを持っており、日本人にとって最も信頼のおける人でもあった。そして何よりも、さまざまな困難にもかかわらず、信仰を捨てることは決してなかった。

とくに、コンゴ人初の会長となったノソンガ4代会長時代は、教会の運営の上にさまざまな問題が起きた。なかでも、本部からの派遣布教師の引き揚げはコンゴ伝道の大きな転換だった。4代会長の下で人が集まらないだけでなく、教会から離反していった信者も少なくなかった。会長の理不尽な言動もあったようだ。しかし、ピエール氏はそれをむしろ自身に与えられた神様からの「試練」ととらえた。神殿での講話のなかでその時のことを振り返り「自身の信仰がこうしてあるのは、4代会長のおかげである」と語っていた。2000年の内戦以降の教会の復興のときも、常に「神様からの試しである」と悟り、さまざまな困難に立ち向かいつつ、むしろ自身の信仰をより強固なものにしていった。

1998年、4代会長が悪化する病気の治療のためにパリに行ったことで、教会では責任者が不在となった。その頃にはピエール氏が、本部にとって現地の様子を聞ける唯一の存在となっていた。当時コンゴでは政権を巡って武力衝突が勃発し、教会のある地域が戦闘の舞台となり、住民全員が南部の森へ避難する状況に陥ったのである。政府軍や反政府軍、また外国人の傭兵などに見つかれば命の危険すらあった避難だったという。彼は妻や子どもを必死で守りつつ、同時に教会に繋がる人たちの無事を祈った。ようやく無事に首都に戻ることができた彼は、詳細な様子を綴った手記を海外部へ送ってきた。情報がなくただただ心配することしかできなかった教会本部の関係者は、彼や信者たちの無事に安堵したが、同時にその内容に驚かされた。とくに教会を離れ、森へ逃げる様子が淡々と書かれた手記には、「ああ、もうこれまでか」と死を覚悟した瞬間も綴られていた。

内戦以降の教会の復興にいち早く着手したのもピエール氏だった。その歩みは、教会の敷地内に散乱したものを集めるところから始まった。教会建物は砲弾の被害を受け、附属建物の内部はすべてのものが略奪の対象となったようで何も残されていなかった。ノソンガ会長は当時パリで病気治療中だったので、責任者不在のまま教会の復興が始められた。一人また一人と避難生活から教会に人が戻ってくると同時に、教会をより組織的に運営する形が整い始めた。やがて教会の「臨時運営会」という組織に発展していくのだが、2001年、現地信者の要望を受け、不在となった会長の交代として、特命代表が置かれることになった。そのときには彼は実質的にコンゴにおける責任者となり、やがて2003年の会長就任へとつながっていった。

会長就任後の彼の教会の活動で特筆すべきは、さまざまな面で「現地化」を模索する動きだったと言えるだろう。「コーラス隊」の初期の曲に『おやさま』があるが、それは彼の作詞作曲だった。教会として「コーラス隊」の存在が欠かせないのがコンゴの宗教文化である。彼は常にコンゴの状況に合わせた伝道のあり方を意識していた。こどもおぢばがえり期間中に開催される「こどもの祭り」は、おぢばがえりができないコンゴの子どもたちに、少し